

文部科学大臣賞の受賞にあたって

茨城県境町役場 石川 和彦

今回の文部科学省大臣の受賞は、今後のスペイン語学習の継続にあたって、この上なく大きな意味のあるものとなりました。受賞を励みに、今後もスペイン語の習得に精進したいと思います。

私がスペイン語と出会ったのは、茨城県が主催する「2020年南米交流推進青年派遣事業」でした。この事業は、スペイン語を公用語とするアルゼンチンの人々や文化との交流を目的としたもので、事業の存在を知った私はすぐに応募を決意しました。なぜなら、私が生まれ育ち、勤務している茨城県境町はアルゼンチンと約90年もの間、交流を続けているからです。

応募後、ありがたいことに現地派遣が決定し、初めて触れるスペイン語に不安を抱えながらも、スペイン語講師による事前研修が始まりました。学習を進める内に、段々とスペイン語ならではの発音やイントネーション、アクセントなどが非常に心地よく感じるようになり、不安も少しずつ和らいできたころ、現地派遣の日を迎えました。しかし、実際の現地滞在では、自分の感じたことをうまく相手に伝えられず歯がゆい思いをする場面がたくさんありました。このことをきっかけに、「いつかスペイン語だけで会話できるようになる」ということが、次の私の目標になりました。

そして帰国したときに見つけたのが、スペイン語検定でした。私は、すぐに受験を決意し、まずは派遣事業の復習を兼ねて6級、5級合格を目指すことにしました。独学で学びつつ、「これはスペイン語でなんと言うのだろうか」、「こんなときどう表現するのだろうか」などと考えながら、日常生活の中にもスペイン語を取り入れてみたりもしました。

スペイン語学習は、私の視野を知らなかった世界へと広げ、生活をより豊かにしてくれました。以前は聴くことがなかったスペイン語の音楽なども聴くようになり、歌って、楽しむようにもなりました。そしていつかは、このスペイン語を仕事にも活かし境町とアルゼンチンとの国際交流事業にも携わりながら、町内の子どもたちが世界へ視野を広げる手伝いのできればと考えています。

私はスペイン語検定の受験によって、スペイン語の面白さをさらに知りました。もちろん、母国語以外の言語を学ぶことは楽しいことばかりではないと思います。しかし、少しずつですが、必ず成長していくものだと思います。今後、多くの方がスペイン語に興味を持ち、更に身近な言葉となっていくことを期待します。